

氏名	鎗田 英樹
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記番号	甲第 68 号
学位記授与の日付	2019 年 3 月 15 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	精神障碍のある人を対象とした競技性スポーツの実施・普及の特徴とその発展のあり方に関する探索的研究
論文審査委員	審査委員長 小原 眞知子 審査委員 大島 巖（主指導教員） 審査委員 藤岡 孝志（副指導教員） 審査委員 斉藤 くるみ 審査委員 木村 容子

精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの実施・普及の特徴と

その発展のあり方に関する探索的研究

鎗田英樹

本研究の目的は、精神障害領域における競技性スポーツで、当事者と支援者の相方が目指す実施・普及の方向性を明らかにし、有効な実施・普及モデルを探索的に構築することである。また、その取り組みが当事者選手や社会に、どう影響するのかを明らかにすることである。

研究方法は、競技性スポーツに取り組む当事者および支援者への聞き取り調査から実施・普及の暫定モデル開発を行い、質問紙を用いた全国調査からモデルの修正を行った。なお聞き取り調査では内容分析、質問紙調査では統計解析を行った。

本研究では文献調査の結果から、精神障害のある人が競技性スポーツと出会い、仲間と「勝利」を目指すなかでエンパワメントされること。また、その発展が社会的統合やアンチ・スティグマにつながることを概念的な枠組みとして提示した。続いて当事者および支援者へ聞き取り調査から、当事者選手は競技性スポーツに勝利だけでなく仲間との交流や社会的統合を望んでいることを示した。また、競技性スポーツは当事者が仲間との活動で自信をつける機会となっており、支援者も社会的統合やアンチ・スティグマにつながることを期待していた。そこからスポーツを介した社会的統合を目的とする3期に渡る暫定版実施・普及モデルを開発した。ま

た全国のチームに対する質問紙調査では、スポーツに対するチームの志向度のパス解析を行い、モデル図を作成して暫定版実施・普及モデルとの対比することでモデルの類似性を確認した。

本研究では精神障害領域の競技性スポーツの特徴を明らかにし、その実施・普及モデルと社会的統合の可能性を示したが、まだ理論モデルの段階であり今後に課題を残している。しかし精神障害者を対象とした競技性スポーツの発展が当事者をエンパワメントし、社会的統合に寄与することや、実施・普及がその効果を高めることを示すなど、今後の実践や研究の発展にも寄与しうる重要な知見を創出出来たと考える。

Abstract

Exploratory Model Construction of Dissemination and Implementation Approaches to Promote Competitive Sports for People with Severe Mental Illness, and their Developmental Stages in Japan

Hideki Yarita

To exploratorily develop a model to promote competitive sports for people with mental health problems, this study examined the goals of such promotion from the perspectives of both these people and their supporters, as well as the influence of this approach on the former and society.

In my previous studies, I conducted interviews with athletes with mental health problems and their supporters to develop a tentative model to promote competitive sports for such athletes, and a nationwide questionnaire survey to improve the model, with content and statistical analyses, respectively.

As the first step, I systematically reviewed the literature to determine competitive sports suitable for both athletes with mental health problems and their supporters. The results indicated the necessity of establishing a model that is also effective for social integration. Subsequent interviews with athlete and supporter groups revealed that the former do not necessarily compete to win in competitive sports, and they seek communication with peers and social integration, and the latter's activities aim to

promote the reduction of stigma toward people with mental health problems and their social integration through sports. Based on these findings, I developed a 3-term tentative model for social integration through sports. Using this model, I conducted a questionnaire survey involving sports teams throughout Japan, and performed pathway analysis based on orientation toward sports. The similarities with the model diagram confirmed the validity of the model.

In the present study, I examined effective approaches to promote competitive sports for people with mental health problems, and their impact on social integration. Although the model is still theoretical, and some challenges have yet to be addressed, the study may have significance in providing useful insights for the future promotion of and research into these sports, suggesting that the development of competitive sports for people with mental health problems leads to social integration, including social integration through sports, rather than increased competitiveness.

【審査結果の要旨】

1 審査委員の構成と審査の経過

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規定及び同博士後期課程修了細則に基づき、第3次予備審査及び最終審査から成り立っている。審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員5名が担当した。5名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長	小原 眞知子	医療福祉、ソーシャルワーク論、高齢者家族支援
審査委員	大島 巖	精神保健福祉 福祉プログラム評価
審査委員	藤岡 孝志	子ども家庭福祉 臨床心理学
審査委員	斉藤 くるみ	手話言語学、脳神経言語学、障害学、コミュニケーション論
審査委員	木村 容子	子ども家庭福祉 子育て・親育ち支援

2018年10月31日までに提出された第3次予備審査博士論文について、審査委員がそれぞれ精読し、11月24日の公開口述試験を行った。それらの審査を踏まえた各審査委員の指摘事項を審査委員長がとりまとめ、2019年1月7日及び1月18日までの修正、更に2月18日までの修正を認め、審査委員会は指摘事項に対応した論文の提出を受けて審査を行った。その結果、5名の審査委員全員が合格とし、審査委員会において第3次予備審査の合格が了承された。次いで、2月28日までに最終審査及び最終試験の申請がなされ、審査委員会は、提出された本論文は博士（社会福祉学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。それを踏まえ、審査委員5名連名による「博士論文最終審査及び最終試験結果報告書」が作成され、2019年3月4日の社会福祉学研究科委員会にて審査結果が提案され、了承を得た。

本学学長は、これらの手続きを経て、2019年3月15日に「博士(社会福祉学)」の学位を与えることとした。

2 博士論文の評価

近年、障害者の競技性スポーツの推進が強化されている一方で、その推進方法等については体系化されていない現状にある中で、本論文の目的は、とりわけ身体障害者スポーツと比較するとその普及や実施基盤が弱い精神障害者の競技性スポーツの実施・普及モデルを構築し、その発展を目指したものであり、学術的にも社会的にも意義ある研究である。本論文では大きく3つの調査から、実施・普及モデルの構成要素と競技性スポーツへの発展プロセスが確認でき、仮説モデルが得られたことは高く評価できる。研究全体はプログラム評価の理論と方法論を活用し、先行研究の知見から暫定版実施・普及モデルの仮説を立て、調査を通じ探索的に分析し仮説モデルの構築へと導いた点や研究から得られたエビデンスは学術的価値の高いものといえよう。ここに至るまで様々なプロセスを経たが、研究課題を科学的に追求する自立した研究能力、社会福祉実践の向上や発展に資することのできる高度の実践的研究能力を有していると評価する。

本論文は、実施・普及モデルを探索的に体系的に明らかにした実証研究としての価値は高いもの

の、審査委員から以下の意見が出されたことも付記しておく。1)モデルを裏付ける理論的検討が必ずしも十分に行われていない。2)審査段階で探索的研究に論題変更をすることは適切ではない。これらに対して、その後の精力的な加筆・修正の努力の結果、全体として競技性スポーツの実施・普及を前提とした探索的なモデル開発研究としての位置づけが明確になった。以上のことから、本審査委員会では、本論文を課程博士論文として十分な水準に達していると判断し、合格とするとの合意に至った。

3 最終試験の結果

最終提出された博士論文は十分な水準に達していると判断した。本論文は日本のみならず、世界的にも適応しうる精神障害者の競技性スポーツの実施・普及モデルを探索的に明らかにする実証的モデル構築の研究である。全国レベルでの調査を通じ、実証的に実施・普及の仮説モデルを構築した点においては、社会的な意義は高い。また、精神障害のある人を対象とした競技性スポーツの実施・普及の特徴と社会的統合に与える影響という点では独自性があり、かつ学術的意義の高い研究である。本論文は、社会福祉学においても意義深い研究であり、豊かな学識がなければ博士論文の完成には至らなかったであろう。さらに、今後、精神障害のある人の競技性スポーツの実施・普及が社会的統合に関連している諸概念等の整理をすることで、社会福祉学において、新たな理論が生み出される研究に発展することを期待したい。